

日本仏教心理学会

第9回学術大会

大会テーマ:

『仏教と心理学の視点から見た

日本的意識』

—プログラム・要旨集—

文教大学

2017年12月10日(日)

*The 9th Annual Meeting of
The Japanese Association for the Study of
Buddhism and Psychology
Program and Abstracts
10th of December 2017
Bunkyo University*

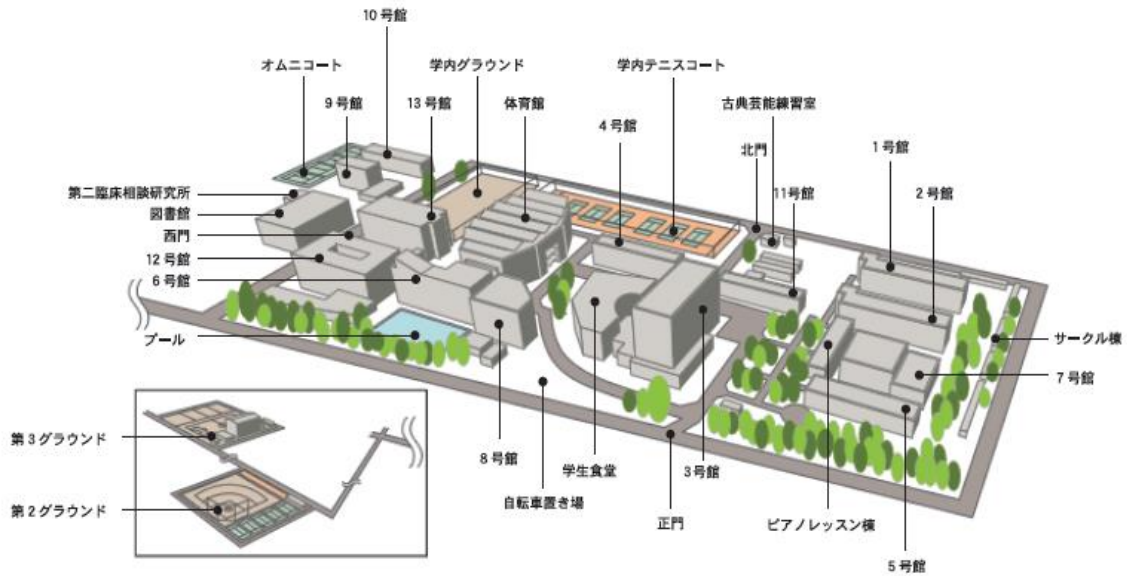
目次

目次・日程表	2
大学構内案内図	3
公開講演 及び 公開シンポジウム	5
個人発表	6
個人発表要旨	8
分科会	14

日程表

12月10日（日）

9：30～	受付開始	12号館1階ホール
10：00～10：10	挨拶	12号館1階12101
10：10～11：20	公開講演	（同上）
11：30～12：50	シンポジウム	（同上）
	昼食	
14：00～16：00	個人発表	12号館1階12101,12104
	休憩	
16：15～17：20	分科会・交流タイム	12号館2階12201
17：30～18：20	総会	12号館2階12203
18：30～20：00	懇親会	学生食堂2階

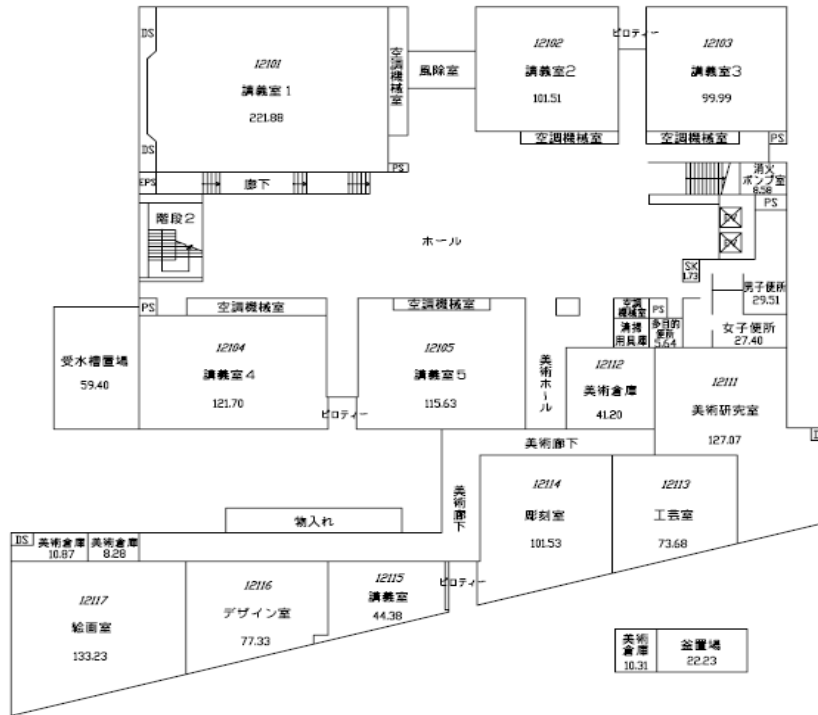


●● 経路案内

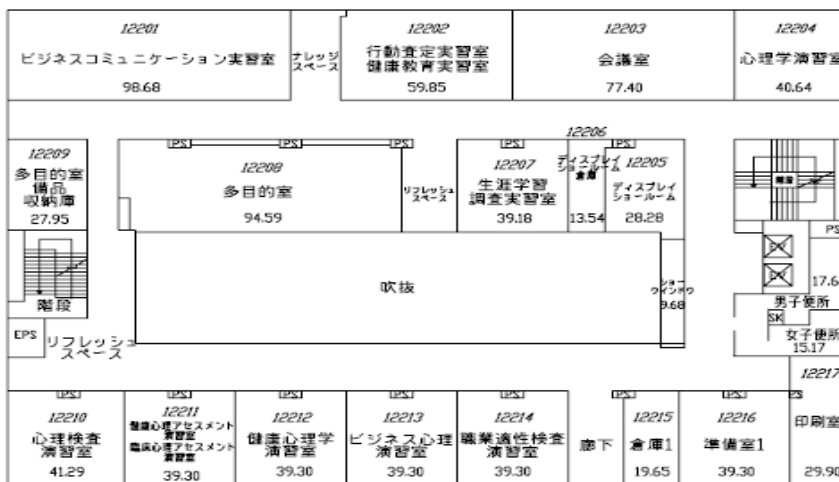


北越谷駅(東武スカイツリーライン・東京メトロ日比谷線・半蔵門線・東急田園都市線(直通乗り入れ) 西口下車徒歩10分
※北越谷駅には準急・区間準急・普通が停車します。(快速・区間快速・急行・区間急行は停まりません)

文教大学12号館案内図



1階平面図 S=1:300



2階平面図 S=1:200

公開講演

時間	講義室1 (12号館1階,12101)
10:10 ~ 11:20	「ペルソナ心理学と日本的意識の起源 ーユング心理学で読むイザナギ神話ー」

講演者： 高尾 浩幸 (文教大学人間科学部臨床心理学科教授)

司会： 未定

公開シンポジウム

時間	講義室1 (12号館1階,12101)
11:30 ~ 12:50	「仏教と心理学の視点から見た日本的意識」

発題者： 葛西 賢太 (宗教情報センター・上智大学グリーフケア研究所研究員)

加藤 博己 (駒澤大学講師)

岡本 有子 (東京情報大学・和光大学非常勤講師、ネパール密教舞踊家)

司会： 未定

個人発表

時間	第1部会 講義室1 (12号館1階,12101) 司会： 未定	第2部会 講義室4 (12号館1階,12104) 司会： 未定
14:00 ～ 14:30	<p>近藤 伸介 (佛教大学研究員)</p> <p>「なぜ我々は解脱を目指すべきか ーノージックの「経験機械」を手掛かりにー」</p>	
14:30 ～ 15:00	<p>菅原 圭 (京都文教大学大学院臨床心理学研究科 博士後期課程)</p> <p>「浄土真宗の僧侶として生きるということ ー心理学的観点からー」</p>	
15:00 ～ 15:30	<p>太田 俊明 (京都市)</p> <p>「浄土思想と心理学の交流史に関する考察」 ー現存宗派の枠を超えてー</p>	<p>西村 竜騎 (北星学園大学大学院臨床心理学専攻 修士課程)</p> <p>「大学生のスピリチュアリティと アイデンティティの関連」</p>
15:30 ～ 16:00	<p>影山 教俊 (日蓮宗勧学院嗣学)</p> <p>「心理療法としての『摩訶止観』 ーそのアセスメントと心理臨床についてー」</p>	<p>新田 耕佑 (京都文教大学大学院/ 宝塚市教育委員会)</p> <p>「迷うことの意義ー宗教間の比較を通じて」</p>

- ※ 個人発表は、発表15分、質疑応答10分です。
- ※ 発表12分で1回目のベルが鳴り、15分で2回目のベルが鳴り、25分で3回目のベルが鳴ります。
- ※ なお、プログラムを時間通りに進行するため、質疑応答時間の延長はいたしませんので、あらかじめ、ご了承ください。

Memo

個人発表 発表要旨

14:00~14:30 第1部会 講義室1 (12号館1階,12101)

なぜ我々は解脱を目指すべきか

——ノージックの「経験機械」を手掛かりに——

近藤 伸介 (佛教大学研究員)

本発表では、ロバート・ノージック Robert Nozick が 1974 年に出版した『アナーキー、国家、及びユートピア *Anarchy, State, And Utopia*』において提示した「経験機械 experience machine」という思考実験を取り上げ、これを仏教哲学である唯識と比較し、その類似性を指摘しつつ、我々はなぜ解脱を目指すべきなのかという問題について考えてみたい。

経験機械とは、自分が望むどんな経験も与えてくれる架空の機械であり、この機械につながれている間、我々は脳に電極を取り付けられ、タンクの中で漂いながら、望み通りの幻想世界を見ることが出来る。その間、我々はすべてが実際に起っていると信じることになり、また一定期間が過ぎたらタンクの外に出て、次の期間の経験を自分で選ぶことができるとする。このような条件を設定した上で、ノージックは「あなたはこの機械につながりたいと思うだろうか」と問いかける。これは、もし機械が自分の望むどんな経験も与えてくれるとしたら、たとえタンクの中で漂いながら一生を終えるとしても、我々にとってそうすべきでない理由があるだろうか、という問いである。これに対してノージックは、我々には機械につながれることを欲しない理由があるという。それは次の三つである。

- ①我々は経験だけが欲しいのではなく、実際にその行為を行うことを欲している。
- ②我々はタンクの中で漂う漠然とした何者かではなく、一つの確かな在り方、一人の確かな人間であることを欲している。
- ③我々は自分の経験を機械が提供する「人工の現実 man-made reality」に限定されることを欲しておらず、「より深い現実 deeper reality」との接触を欲している。

ノージックは言う、「我々が欲しているのはおそらく、現実接触しつつ自分自身を生きることである。(そしてこのことは機械が我々に代わってできることではない。)」と。

一方、唯識の代表的な論書『摂大乘論』には、我々の認識の在り方に三種あると述べられている。それは「二分依他」と呼ばれるもので、「依他起相」を根底とし、そこから「遍計所執相」と「円成実相」という二種の認識が成立するというものである。このうち「遍計所執相」とは、虚妄分別によって構成される幻想世界であり、解脱していない凡夫はこの幻想世界を現実と信じて生きている。それに対して「円成実相」とは、無分別智によって開かれる真の世界であり、我々は解脱することでここに至るとされる。唯識が語るこの二種の認識は、それぞれノージックの語る「人工の現実」と「より深い現実」に対応しており、両者の思想には類似性が見られる。そうであれば、我々が経験機械につながれることを欲しない理由を手掛かりに、我々が「遍計所執相」から解脱し「円成実相」を目指すべき理由も考えることができると思われる。本発表では、この点について考えてみたい。

14:30~15:00 第1部会 講義室1 (12号館1階,12101)

浄土真宗の僧侶として生きるということ

—臨床心理学的観点から—

菅原 圭 (京都文教大学大学院臨床心理学研究科博士後期課程)

浄土真宗の僧侶の援助者側としての研究は数多く存在する。しかし、浄土真宗の僧侶がどのように僧侶になり、僧侶としての生き方を選択してきたかという研究は注目されてこなかった。そこで本研究では、浄土真宗の僧侶として生きることをどのように受け入れていったのか、そして浄土真宗の僧侶として生きる中でどのようなことが僧侶の中で起こっているのか、ということについて「葛藤」を中心に検討してみたい。

方法

浄土真宗の男性僧侶に1対1形式の半構造化面接を行い、そのデータをM-GTAを用いて分析した。

結果

M-GTAを行った結果、28個の概念、8個のカテゴリが生成された。

考察

本研究では「浄土真宗の僧侶」の視点から捉えた「浄土真宗の僧侶が僧侶になるための葛藤のプロセス」を提示した。得られた結果は、葛藤を乗り越えるわけではなく、様々な葛藤と折り合いをつけ、抱え続けながら、僧侶としての自分を確立し、それを個人の自分に取り込み、統合していくというプロセスである。この葛藤のプロセスは、浄土真宗の開祖である親鸞の生涯に非常に即しているように思われる。親鸞の仏教との出会いは苦しみや悩みを与えるものであった。これは【寺院に生まれた運命性】を抱え、悩み苦しんでいることと重なる。その後親鸞は下山し、法然と出会う。そこで初めて同じ考えを持つ人と出会うという経験をする。その後島流しにあり、新潟での生活の中で、共に生きるとは何か、人間の矛盾など様々なことを学んだ。これは【価値観の変わる出会い】と重なる。その後、親鸞は息子と絶縁するという経験をする。その中で、親鸞はかえって絶縁しなければならない子を持った親として、息子の犯さねばならなかった罪の深さを、自身に重く背負わせた。これは違う形で【寺院に生まれた運命性】という葛藤が表れていることや、<自身の子どもに繋げる責任>と重なる。これは、浄土真宗の教えそのものを、僧侶は人生を通して歩んでいるということではないだろうか。

15:00~15:30 第1部会 講義室1 (12号館1階,12101)

浄土思想と心理学の交流史に関する試考

—現存宗派の枠を超えて—

太田 俊明 (京都市)

日本仏教における潮流の一つとして、阿弥陀仏の名号を唱えることで往生できるとされる浄土思想が挙げられる。この思想を背景にした教団は数多く、大きく分けても浄土宗(鎮西派)・浄土宗西山三派(時宗含む)・浄土真宗がありそれぞれに個性をもつ。

この浄土思想と心理学・心理療法の接点・焦点化の研究については教団・特定の祖師を背景にした思想レベルでは着実に進行しているように考えられる。一例としてカウンセリングと仏教(真宗)が挙げられる。カウンセリングと仏教に関する分野に関しては特定の祖師を背景にした論文が数多く見られ、近年では周辺分野にも拡充がなされ研究が進んでいるように見受けられる。しかし、特定のテーマに基づいて深化した研究論者は存在するものの、研究史始め心理学を俯瞰した立場のものは管見の限り存在しない。これは太田俊明[2003]「仏教と心理学・心理療法に関する著作リスト(修正版)」(『西山学会年報』13号)にも当てはまる。このリストでは、一応分野ごとに分類を試みたものの、各々の分野ごとの詳細な分析、歴史的経緯に関する論者は作成されなかった。研究史が執筆されなかったことや配列の問題も批判されてしかるべきである(岩田文昭[2004]「仏教徒心理療法に関する文献表にについて」『心理主義時代における宗教と心理療法の内在的関係に関する宗教哲学的考察』平成13~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書)。その後も、一部にはそのような動きがあったものの(李光濬[2016]「禅と浄土教の心理学研究史」藤能成『仏教と心理学の接点 浄土心理学の提唱』法蔵館)、特定の個人の業績を中心にしたものであり、日本における浄土思想の流れから考察したものは皆無と考えられる。

この原因はいくつかある。それは、中国仏教より伝来している禅と浄土教が一体化されている禅浄一体の思想である。また浄土思想は日本に伝来されたものの、法然以前は主たる教派形成がなされなかったこともある。更に言えば現行の浄土系教団の教学構造が安心を中心にした立場と起行を中心にした立場とに二分化されていたこと。このことにより法然上人の正嫡を主張するあまり教団間の教学論争のみが先行し、全体的かつ包摂的な心理的側面の視座を見失っていたことも挙げられる。ゆえに浄土思想における教団を超えた思想と心理学との連関が課題となる。また禅と心理学みたいに時代区分の構成が可能か否か疑問もある。

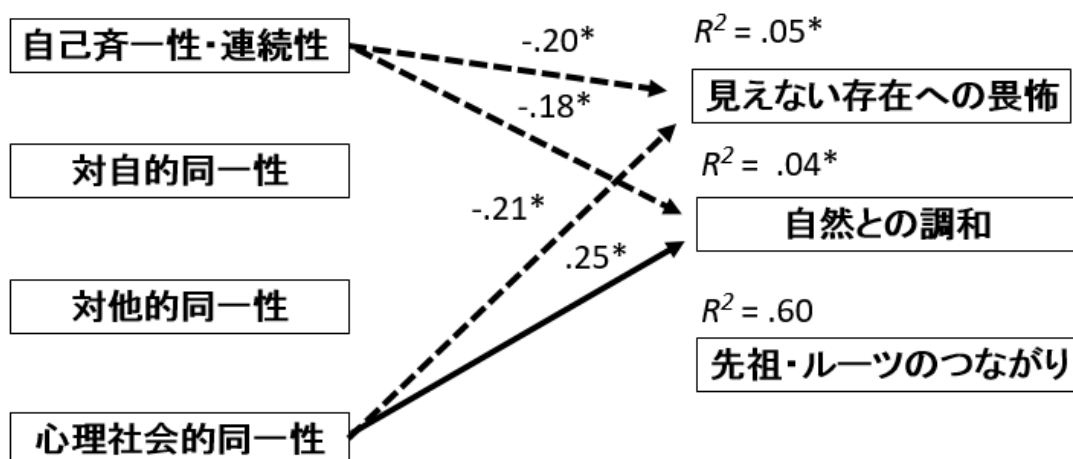
そのような状況下でありながらも可能な限り資料を集め・分析し潮流を把握すること。結果区分分析の創造と展開を試論し、貢献することを通じて本発表の目的としたい。

15:00~15:30 第2部会 講義室4(12号館1階,12104)

大学生のスピリチュアリティとアイデンティティの関連

西村 竜騎 (北星学園大学大学院臨床心理学専攻修士課程)

学生の宗教意識調査では、若年層の宗教信仰の減少の一途をたどっているが(西、2009)、神仏や靈魂、パワースポットなどの存在を信じる傾向は変わらず、むしろ増加傾向でもあること(国学院大学、2015)が述べられている。青年期がスピリチュアリティを信奉する心理的背景を検証するため、本研究では、青年期のアイデンティティとスピリチュアリティの関連を調べた。調査対象者は、北海道にあるA大学の大学生225名(男性74名、女性151名、平均年齢19.22歳、SD=1.17)に質問紙調査を行った。尺度には、谷(2001)が作成した多次元自我同一性尺度20項目、濁川ら(2016)が作成した日本人青年スピリチュアリティ評定尺度のうち「見えない存在への畏怖」「自然との調和」「先祖・ルーツ」因子を本研究では使用、ご利益行動について16項目、宗教信仰の有無を尋ねた項目を使用した。スピリチュアリティ尺度の下位尺度である「見えない存在への畏怖」「自然との調和」「先祖・ルーツのつながり」を従属変数として多次元自我同一性尺度の下位尺度である「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」因子を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、自己斉一性・連続性は「見えない存在への畏怖」と「自然との調和」に負の影響が見られた。このことより自分が自分であるという一貫性をもつ感覚が低い大学生は、目には見えない存在を信じ、自然からの力を感じやすいことがわかった。心理社会的同一性は「見えない存在への畏怖」に負の影響、「自然との調和」に正の影響が見られた。このことより自分と社会との適応的な結びつきの感覚が低い大学生は、目には見えない存在を信じやすく、そのような感覚が高い大学生は、自然からの力を感じやすいことがわかった(図1)。



* $p < .05$ ** $p < .01$

図1

15:30~16:00 第1部会 講義室1 (12号館1階,12101)

心理療法としての『摩訶止観』

—そのアセスメントと心理臨床について—

影山 教俊 (日蓮宗勸学院嗣学)

心理療法へと応用された「マインドフルネスに基づいたストレス緩和法 [MBSR]」(ジョン・カバット・ジン、1979年)は、近年ではマインドフルネス訓練にもとづいたうつ病再発予防プログラム「マインドフルネス認知療法 [MBSR]」、またマインドフルネス訓練を取り込んだ境界性パーソナリティ障害プログラム「弁証法的行動療法 [DBT]」、さらに第三世代認知行動療法「アクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT)」など医学的な治療の分野へと展開している。この過程で話題となっているのは、これまでのマインドフルネス瞑想法などの技法論的な展開ばかりではなく、マインドフルネス訓練の効果とその機序などへの論及である。すなわち、心理療法としてのアセスメント(見立て)と心理臨床についてである。

ところで、日本仏教に伝承する瞑想技術の「止観」は、明治7年の医療法改正で寺社仏閣における施療施薬が禁止され、明治16年の医師国家試験で西洋医学のみが公認されるまでは、伝統医学に組み入れられていた(明治3年『祈祷改正規則之掟』)。また本来、瞑想技術の伝承形態といえば仏道(行学二道)であり、瞑想体験は師匠による技術指導と文献(經釈論)によって裏打ちされてきた。とくに瞑想技術の大著『摩訶止観』(中国天台、6C)の「止観病患境」には、二種類の伝統医学にもとづく治病法が示されているばかりか、瞑想体験による治病法のアセスメント(見立て)と心理臨床を明かしている。

天台大師は瞑想技術によって誘導される最深の瞑想体験を三昧(サマーティ)と呼び、「ただ一心に三昧の瞑想体験をすれば衆病は消えてしまう」と三昧の体験による治病の効用を明かし、そのアセスメント(見立て)として「意識が過剰に働くことで気血の流れが乱れて病気が発症する」と心因論を展開する。さらに大師は自らの瞑想体験にもとづき、衆病の原因である自我意識(妄念)が生成される過程と、瞑想技術によって自我意識から純粹意識(認知主体、マナス)が分離される過程の心理臨床を明かしている。

『摩訶止観』「第七正修止観」「第一観陰入界境」で、龍樹菩薩著『十住毘婆沙論』(鳩摩羅什訳、5世紀)の三科開合(陰入界)を引用し、瞑想技術の対象となる自我意識の生成と、その意識の諸相が感覚的な世界(十二入)と、表象的な世界(十八界)によることを解説する。

とくに仏教心理学の五陰(色受想行識、パンチャ・スカンダ)にもとづき、私たちの自我意識が成立する過程について、「①身体・②感覚器官・③表象機能・④意識の統合機能」の四つの要素は記憶連鎖(名色、ナーマ・ルーパ)であり、それが⑤意識の認識作用(識、マナス)の要素に映ることで、そこに記憶を頼りに分別する自我意識が生まれるという。これが「名色」と呼ばれ、気づいて(色)名前をつける(名)という人間の認識作用となり、記憶連鎖を生みだしてゆく。そして、その一念は記憶連鎖によってさまざまな事象を生じさせるという。これらを生かして「心理療法としての『摩訶止観』」について論じたい。

15:30~16:00 第2部会 講義室4(12号館1階,12104)

迷うことの意義—宗教間の比較を通じて

新田 耕佑 (京都文教大学大学院/ 宝塚市教育委員会)

仏教における「迷い」は輪廻という思想と関係がある。仏教事典において輪廻とは、「生あるものが生死を繰り返すこと(中略)、解脱しない限り、生ある者は迷いの世界である三界六道を輪廻しなければならないと考えられている」とある(中村ら編,1989,p.837)。仏教では、解脱、すなわち、何事をも分別の態度をもって臨み、煩悩を制御することによってとらわれのない心の静けさを得ようとする、悟りの境地を目指すことが究極の目的とされている。そのために、様々な思想や修行が説かれ、実践される。

我々は日常的に「迷う」という言葉を使うが、はたして「迷い」を経験しているだろうか。「迷う」という言葉の意味は一定ではないが、文化を超えた西洋、聖書には「さまよう」ことにまつわる描写が散見される。それは、カインに始まり、やがては以降の人々にまで至る。「さまよう」ことと、「迷う」こと、仏教における「迷い」に共通する経験はあるのだろうか。言語表記としては共通していると思われるが、その個人がどのように「迷い」を経験しているかについては不明瞭である。

仏教では「迷い」から抜け出すことが強調され、聖書には「迷わない」ことが示されており、「迷い」から抜け出すことを目指しているという点は、両者に共通している。しかしながら、「迷い」から抜け出すには、まずどのような「迷い」を経験しているのか、あるいは「迷う」ことの性質について、吟味する必要があると思われる。

仏教的思想、「迷う」という言語表記、聖書における記述から、共通する「迷う」という経験を通じて、普遍的な「迷い」に関する示唆が得られることと思われる。

本発表では、人々の経験する「迷い」について考察し、そこから抜け出すことに関する示唆を提示したい。

分科会（12号館2階,12201）

本学会において分科会の活動は、昨年の第7回学術大会より具体的に動き始めました。分科会の目的は、専門性や研究性を高めることはもちろんですが、年に一度の大会への参加だけでは希薄になりがちな会員同士の交流を、より密なものとして頂くことに主眼を置き、会員一人ひとりの所属感を高めることを重視しております。仏教と心理学という大変広い分野を扱う学会という性格上、会員の方々の関心領域は多岐に渡ります。分科会活動で、ご自身の興味・関心領域を掘り下げる良い機会としていただけたらと思います。なお、所属分科会が未定の方は、以下の紹介文を参考にされながら所属希望の分科会を決めていただき、分科会の時間にご参集ください（複数の分科会に所属可）。

分科会一覧

- 1) 深層心理（唯識、アビダンマ、精神分析、分析心理学等）
- 2) 瞑想（実践、脳科学、禅、マインドフルネス等）
- 3) 仏教的ケア（スピリチュアルケア、看取り、トラウマ、グリーフ、緩和ケア等）
- 4) 社会貢献・宗派間連携
- 5) カウンセリング、心理療法（真宗カウンセリング、内観療法、森田療法等）
- 6) 運動史（人物史、思想史、実践史）
- 7) 教育（仏教教育、道徳・倫理）

分科会紹介

深層心理（唯識、アビダンマ、精神分析、分析心理学等）	
佐久間秀範	sakumahs@plum.plala.or.jp
森岡正芳	jm1Orute@dream.jp
<p>今回の分科会では仏教の場合と西洋の心理学の場合とでどのような歴史的推移でこころのあり方を扱ってきたかについて問い直すことから初めたいと思います。一般に唯識思想とフロイト・ユングの心理学とが「深層心理」という言葉で括られることがあります。しかし例えばアーラヤ識という概念ができあがる過程と集合的無意識ができあがる過程とを見ただけでも、文化的思想的に大きな違いがあります。そこで共通する部分と異なる部分とを洗い出し、仏教学と心理学との学問分野の間にある垣根を見つめて行くことで、両者の間の有意義な研究が進められるような基盤づくりができればと考えています。今回の分科会のリーダーをたまたま佐久間（筑波大学・人文社会系 sakumahs@plum.plala.or.jp）が担当することになりましたが、今後は複数の方々に運営できるようにしていきたいと思っています。</p>	

瞑想（実践、脳科学、禅、マインドフルネス等）	
平原憲道	oyabun@cal.berkeley.edu
藤野正寛	fujino.masahiro.68a@st.kyoto-u.ac.jp
<p>「瞑想」分科会では、禅や密教等の伝統的な瞑想実践にのみフォーカスを当てるのではなく、近年科学界でも注目を集める「マインドフルネス瞑想」などを含め、幅広く瞑想を取り巻く課題を議論の対象にすることを目指している。方法論としては、仏教瞑想を理解しその仕組みや効果を解明するために、臨床・科学・文献・実践のそれぞれの立場から知識を共有し、多面的に議論していく。欧米で先行する瞑想の医学的・認知神経科学的な研究成果も積極的に紹介していく。</p> <p>リーダーには慶應大学医学部の平原憲道（専門は医療ビッグデータ・認知科学・意思決定）、サブリーダーには京都大学大学院教育学研究科の藤野正寛（専門は認知神経心理学・ヴィパッサナー瞑想実践）が務める。参加メンバーにはぜひ多方面からの視点を積極的に提供して頂きたい。柔軟な文理融合的な視点で刺激的な議論が行えることを楽しみにしている。</p>	

仏教的ケア（スピリチュアルケア、看取り、トラウマ、グリーフ、緩和ケア等）

井上ウィマラ

vimalajp@yahoo.co.jp

子育て（チャイルド・ケア）から看取り（ターミナル・ケア）やグリーフ・ケアまで、ケアは人間にとっての本質をなす重要な活動です。現代社会では、こうしたケアは医療を中心に心理や教育関係の専門職の皆さんが支援して下さるようになってきていますが、その重圧は相当なものになってきている様子です。支援者の皆さんの重圧を緩和するため、現場で燃え尽きてしまわないよう具体的な方法とビジョンを示してゆくことは、社会的な貢献になるだけでなく、仏教自体の本質をもう一度見つめ直して現代社会に再構築するための機会にもなると思います。

医療や心理療法のみならず企業研修などにも幅広く応用されていることが日本にも紹介され始めてきたマインドフルネスは、漢訳では「念」と訳されるもので、原語の sati は思い出すこと（sarati）を意味する言葉です。経典には、マインドフルネスのトレーニングには自分を見守ること、他者を見守ること、自他を見守ることの3つの視点が大切だと記されており、律蔵には看取りを含めた看病の相互の実践が出家修行者の間で為されていたことが伝えられています。マインドフルネスの守備範囲がとても広いことは、マインドフルネスがケアの本質に深く関わっていることを示唆しているように思われます。

日本の仏教には真言、坐禅、念仏、題目など多様な修行法がありますが、どの修行においても心が対象から離れて雑念にとらわれてしまうということがあるものです。マインドフルネス（念）のトレーニングは、そうした雑念への対処の仕方に大切な示唆を与えてくれます。そういう意味で、日本仏教に伝わる様々な修行法を通して諸宗派のつながりを回復してゆくための基盤にもなりうると思われ

ます。

この分科会では、マインドフルネスを中心として仏教の本質に深く広く立ち返ることを通してケアとは何かを探求し、それを仏教的なケアとして現代社会に貢献できる形で表現してゆける道を探してゆきたいと思います。

社会貢献・宗派間連携

三輪是法

miwa@min.ac.jp

日本仏教の特徴は、「専修化」と言われています。特化した修行は各宗派によって異なり、独自の形態を保持してきました。そうした修行論を正当化する理論は、依って立つ聖典＝経典の違いに基づいています。しかし、それぞれの経典の教えや修行方法が異なったとしても、共通した目的は、人間の生き方をよりよい方向へと導くことであるといえるのではないのでしょうか。

仏教は日本において、特に人間の生老病死と深く関係をもってきました。時代の推移とともにその役割が他の専門分野に委譲され、仏教の必要性がなくなりつつある現代社会において、あらためて生老病死を見つめ、人間について深く考えることは、よく生きるための基底になると考えられます。特に、「心」の問題に立ち返るとき、日本仏教は宗派性を超えて、社会に偏在する人間の心のあり方と生き方の問題を解決する方法を提示できるように思います。

この分科会では、各宗派の教義に基づく人間心理の研究はもとより、エンゲイジド・ブディズムに見られる社会貢献や実際の布教活動などの実践を通じた心理学的研究を含めて、日本仏教が将来の社会へどのようにコミットしていけるのかという問題について考えていきたいと思っています。

カウンセリング、心理療法（真宗カウンセリング、内観療法、森田療法等）

千石真理

sengokumari@live.jp

黒木賢一

ken@jpname.com

リーダー：心身めざめ内観センター 千石真理、サブリーダー：大阪経済大学人間科学部 黒木賢一

目標：仏教には「心身一如」という概念があるが、「カウンセリング・心理療法」分科会では、主に日本生まれの心理療法と呼吸法や気などの身体的実践を通じた東洋的アプローチの心理療法に焦点を当てる。

分科会メンバーは、自らの心の内を観じ、身体（呼吸、動作、気など）活動の実践を体感しながら、心身を含んだ東洋の心理療法と西洋の心理療法の違いや共通する点など、議論を深めるとともに、文献、症例や研究などを紹介しながら、クライアントにより有効な手法を提供できるよう、研鑽してゆく。

分科会メンバーへの期待：カウンセリング・心理療法を提供する側としてのセルフケアとして、メンバー自身が自己発見としての内観や身体感覚を楽しみつつ、分科会で新たに発見、構築したことを実践に生かし、社会貢献へと繋げていくことを期待しています。

運動史（人物史、思想史、実践史）

葛西賢太	kasai@circam.jp
加藤博己	katohiro@komazawa-u.ac.jp

「運動史」分科会では、「仏教と心理学との対話」に尽力した人々の仕事や人生に触れ、仏教心理学の歴史をあきらかにしていくことを目指しています。

論文や図書、その他の文献をひとつひとつあたっていく地道な研究作業が基盤になりますが、同時に啓発のため、仏教心理学史を学ぶセミナーや講演などの実施を考えております。

当面のリーダーは、葛西賢太（宗教情報センター／上智大学グリーンケア研究所、kasai@circam.jp）と、加藤博己（駒澤大学文学部、katohiro@komazawa-u.ac.jp）が担当させていただきますが、研究（成果の発表も）・運営（連絡や行事運営のボランティア）・一般参加のいずれも歓迎し、有意義な時間を定期的に持ちたいと考えております。

お目にかかるのを楽しみにしております。

教育（仏教教育、道徳・倫理）

ケネス田中	kktanaka@gamma.ocn.ne.jp
-------	--

1. 目的や活動内容

- 心理学の理論や発見を仏教教育に導入。例：論理療法をもって仏教教義を説く。
- 仏教の価値観（慈悲、無常観、無我観等）を心理療法などに導入する。
- 以上のような接点が見られる既存方法（例：内観療法、森田療法、ゲシュタルト療法、アサジオリ等）を分析し、新しい方法の構築への参考として活かす。
- 未だあまり知られていない教育方法を検索、発掘する。
- 全く新しい教育方法を構築する。

2. リーダー＆サブリーダーの氏名、簡単な紹介

リーダー：ケネス田中（武蔵野大学教授、専門：浄土教、アメリカ仏教）

サブリーダー：募集中

3. 分科会メンバーへの期待

心理学と仏教の両領域の英知を採用し、お互いの理解を促進させ、また、社会の諸問題の解決に貢献できる教育方法の充実をめざす人を求める。二十世紀に発生した心理学は、現代的な世界観や方法論を有するので、それを活かし、二五〇〇年という歴史を持つ仏教の価値観や知恵をより多くの人々に

伝達することを目指したい。

日本仏教心理学会第9回学術大会実行委員会

ケネス田中（会長）・吉田悟（大会長）・

松永博子（大会実行委員長）・梅津礼司・山口豊・片岡秋子・

渡辺昇・渡邊美由紀・大島裕子・木内敬太・小笠原亜矢里